HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	SDGsを考える : 暮らし・教育・健康 : 講演概要
Citation	北海道大学環境健康科学研究教育センター主催　WHO環境化学物質による健康障害の予防に関する研究協力センター指定3周年記念 市民講演会 「SDGsを考える　～暮らし・教育・健康～」 2018年10月17日(水)開催 (北海道大学百年記念会館大会議室)
Issue Date	2018-10-17
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/71695
Type	other
File Information	gaiyo.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

WHO 環境化学物質による健康障害の予防に関する研究協力センター
指定三周年記念　市民講演会

SDGs を考える

～暮らし･教育･健康～

講演概要

日 時： 2018年10月17日 （水） 18:00～19:30
会 場： 北海道大学 百年記念会館 大会議室

主催：北海道大学環境健康科学研究教育センター
後援：札幌市／札幌市教育委員会／北海道

SDGs を考える ～暮らし･教育･健康～

日 時： 2018年10月17日 (水) 18:00～19:30
会 場： 北海道大学 百年記念会館 大会議室

司 会：
山内太郎 北海道大学大学院 保健科学研究院 兼 環境健康科学研究教育センター
藏崎正明 北海道大学大学院 地球環境科学研究院 兼 環境健康科学研究教育センター

◆センター長挨拶
18:00－18:05 **小笠原 克彦**（北海道大学大学院 保健科学研究院
兼 環境健康科学研究教育センター）

◆活動報告
18:05－18:10 **「WHO 研究協力センターとして３年余りの活動を振り返って」**
岸 玲子
（北海道大学 環境健康科学研究教育センター
兼 WHO 環境化学物質による健康障害の予防に関する研究協力センター）

◆講演
18:10－18:30 **「持続可能な開発目標（SDGs）と札幌市の取組」**
佐竹 輝洋
（札幌市環境局 環境都市推進部 環境計画課）

18:30－18:50 **「持続可能な世界に向けて：世界と地域をつなぐキーワード SDGs」**
山中 康裕
（北海道大学大学院 地球環境科学研究院
兼 RCE 北海道道央圏協議会）
18:50－19:10 **「環境と健康の視点でとらえる SDGs」**
湊屋 街子
（北海道大学 環境健康科学研究教育センター
兼 WHO 環境化学物質による健康障害の予防に関する研究協力センター）

◆質疑応答
19:10－19:30

持続可能な開発目標（SDGs）と札幌市の取組

佐竹 輝洋
札幌市環境局環境都市推進部環境計画課調査担当係長

2015 年 9 月、ニューヨーク国連本部において「国連持続可能な開発サミット」が開催され、「我々の世界を変革する：持続可能な開発のための 2030 アジェンダ」が採択された。本アジェンダは、国連加盟国 193 か国全ての共通目標として、17 のゴール（目標）と 169 のターゲットからなる「持続可能な開発目標（SDGs, Sustainable Development Goals）」が定められた。

この目標は、2030 年に向け、「誰も取り残さない（されない） - No one will be left behind -」を理念とし、国や自治体だけではなく民間企業や市民団体等、そして個人も含めて全ての主体が取り組むことで持続可能な社会の形成を目指すものである。

札幌市では、2018 年 3 月に策定した、2030 年に向けた環境政策の総合的計画である「第 2 次札幌市環境基本計画」において、環境施策の推進を SDGs 達成につなげていくことを位置付け、「次世代の子どもたちが笑顔で暮らせる持続可能な都市『環境首都・SAPPORO』」を札幌が目指す将来像とし、地球温暖化対策や資源循環、生物多様性の保全といった環境対策を推進しながら、北海道内の資源やエネルギーを適切に活用することで、道内における経済循環にもつなげていくことなど、経済分野や社会分野への効果の波及も目指すこととした。

このような動きの中、2018 年 3 月に内閣府において、地方創生分野における日本の SDGs モデルを構築していくため、自治体による SDGs の達成に優れた取組を提案する都市を「SDGs 未来都市」として選定を行うこととし、同年 6 月 15 日に札幌市を含む全国 29 都市が選定された。

札幌市は、北海道洞爺湖サミットが開催された 2008 年に、市民一人一人がこれまで以上に地球環境保全に取り組む決意を示し、世界に誇れる持続可能な都市を目指し「環境首都・札幌」を宣言した。それから 10 年、次の世代に札幌の豊かな環境と持続可能なまちを引き継いでいくため、SDGs 達成に向け、市民や事業者、大学など、様々な主体とパートナーシップを構築しながら、取組を進めていく。

持続可能な世界に向けて:世界と地域をつなぐキーワードSDGs

山中 康裕
北海道大学大学院地球環境科学研究院
RCE北海道道央圏協議会

1992年の地球サミットで示された先進国が率先して取り組む持続可能性と、2000年のミレニアムサミットで示された発展途上国支援としてのMDGsが、2015年に「我々の世界を変革する:持続可能な開発のための2030年アジェンダ」の中で、持続可能な開発目標(SDGs)として統合された。その結果、あらゆる社会課題が、国際社会から地域社会まで、先進国から途上国まで、SDGsを用いて語れるようになった。例えば、自由貿易などのグローバル経済の地域への悪影響も、SDGsを用いて世界に説明すれば、同様の課題を抱える地域と連携し、国際社会で取り組まねばならない課題にできる。また、自分たちの地域や地球に優しい取り組みを世界に比較的容易に知ってもらえる。逆に説明しなければ、放置している、あるいは、説明責任を果たしていない状況と国際社会から見なされてしまう（ガラパゴス化)。まさに、社会課題の国連による国際標準化(デジュリスタンダート)の状況を迎えている。

持続可能な社会は、常に起こる多様な課題に対して柔軟に対応する社会である。理想の社会を目指すと思われがちだが、いち早く社会課題に気づき、改善できる社会であり、倫理的感受性が高い社会。誰一人取り残さない(no one will be left behind)は、象徴的な表現である。数多くの似た仕組みがある。例えば、国際品質管理規格(ISO9000)も品質を保証しているのではなく、品質を悪くしていることを発見することにより、質向上を図る枠組みを提供している。また、大学で取り組まれている「教育の質の保証」や、環境保全に用いられる順応的管理も、業務改善で用いられるPDCAサイクルも、豊かな人生を送るための生涯教育も同様である。

SDGsも含めたグローバル化社会では、「有言実行」として、さまざまな考えや背景を持つ人たちに、自分の考えや状況を伝えねばならない。また、逆に、相手を理解することや相手の立場を想像できる必要がある。これらは、まさに「対話」の必要性であり、対話が出来る社会は多文化共生社会でもある。このような人材の育成が、小中高大院のあらゆる教育で求められている。特に大学院は「対話」による人材育成の場である。なお、AI化に伴う社会においても「対話」が必要とされる。

環境と健康の視点でとらえる SDGs

湊屋 街子
北海道大学　環境健康科学研究教育センター
WHO 環境化学物質による健康障害の予防に関する研究協力センター

私たちはだれもが健康な生活を送りたいと願っている。健康には私たちの身の回りの環境が大きく関係する。SDGs の 17 目標のひとつ、目標 3「すべての人に健康と福祉を」を軸に、「環境」×「健康」という視点から、私たちがどう SDGs に取り組めるかを一緒に考えていく。

目標３のターゲットのひとつ「2030 年までに、有害化学物質、ならびに大気、水質及び土壌の汚染による死亡及び疾病の件数を大幅に減少させる」について、私たちの身の回りにはどのくらい多くの環境化学物質があり、それらがどのように私たちの健康と結びついているのかを考える。

WHO の報告によると、世界中の死の 23%が、何らかの環境要因と関連しており、その数はおよそ 12,600,000 人にものぼる。つまり、環境を変えることで、これらの死を大幅に減らすことが可能となる。

中でも、特に環境の影響を受けやすいのはぜい弱な子どもたちである。そして私たちの健康は、おなかの中にいるときから、どのような環境に曝されてきたかに深く関わることが知られている。

「環境」×「健康」×「子ども」をキーワードに、私たちが 2000 年代初めより推進している、出生コーホート研究「北海道スタディ」の紹介と研究からわかったことについて、環境化学物質曝露と子どもの発育や発達の関係を、有機フッ素化合物曝露を例に紹介する。

さらに、「WHO 環境化学物質による健康障害の予防に関する研究協力センター」として、環境と子どもの健康について、SDGs の目標達成に貢献するために、私たちが行っている活動をいくつか紹介する。